

日中歴史対話と和解学

劉 傑

(早稲田大学社会科学部教授)

私は政治・外交班に参加させていただきまして、日中の政治・外交関係を、どのような方向で、これからの研究を展開していけばいいかを巡って、先生がたと大変有意義な議論をしてきました。今回は、議論の一部を紹介させていただきます。

先ほど、高先生の基調講演のなかで、日中関係の問題は何かということについて、「中心的な問題」「核心的な問題」という言葉が使われました。いわゆる核心的な問題が三つあるということです。一つは、歴史認識の問題。もう一つは、領土の問題。三番目は、対話の問題です。そのなかでも、特に歴史問題は、他の問題と密接に関係していて、あるいは、ほかの問題のベースをなしている問題です。したがって、歴史認識の問題を、まず政治・外交問題のなかの最も重要な問題として位置づける必要があるのかもしれませんが。政治・外交班は、歴史認識の問題を、どのように政治・外交のなかで扱ったらいいのかということテーマにしてきたわけです。

今日は、その議論の一端をご紹介できればと思います。皆さまのお手元に、今日お話しするパワーポイントのコピーがあります。それは日本語になっております。スクリーンのほうでお見せしているのは中国語のものです。時間のこともありますので、先ほど来、先生方が、自分の内容を中国語から日本語に、あるいは日本語から中国語に翻訳されていま

すが、両方の資料を見ていただいて、私は日本語で話をさせていただきたいと思います。

それから、前のほうに先生方がたくさん座っておられまして、この1時間のなかで先生方の議論もぜひ聞かせていただきたいという気持ちもありますので、私の発表をなるべく短時間で終わらせたいと思います。

「日中の歴史対話と和解学」という課題を与えられましたが、これからの日本と中国の対話をどのように進めたらいいのかということが、大きなテーマだと思います。

(スライド 新時代の日中対話)

まず、何を語るのか、いかに語るのかということ。日本と中国との間では、長年、対話をいろいろなかたちで進めてきました。もちろんその時代ごとにテーマが違います。日中国交正常化当時は、台湾問題と戦後処理の問題が大きなテーマでした。平和友好条約のときは、反覇権の問題が対話のポイントとなりました。その後、1980年代から1990年代は、中国の近代化と日中経済協力がテーマでした。1990年代以降は、歴史認識問題、領土問題というもので対話をしましたが、対話をしない、あるいは対話ができないような状態も長い間続きました。そして、「転機が訪れた」と、先ほど先生方がおっしゃっていますが、それではこれからの日中対話はどういうことを話すべきだろうか。

つい最近まで、日中関係は「戦略的互惠関係」と定義されてきたわけです。この言葉は

非常にいい言葉ではありますが、日中友好時代から戦略的互惠関係の時代へ転換された後に、日中関係はあまりよくありません。戦略的に物事を考えることは、非常にいいことではあるけれども、戦略的と信頼関係との間には、微妙な距離があります。やはり信頼関係に基づく和解、それをどのように実現していくのかということが、これからの日中対話のテーマにすべきではないか。政治・外交のなかでこのテーマを設定しなくても、研究者の間では、このテーマを議論の中心に据えなければならないと思います。

(スライド 日中間の歴史和解は達成されたのか)

では、日中の間には、なぜ和解が実現できないのかということについて考えます。実は、私は六十何名の研究者と一緒に、研究グループをつくって、「和解学」について研究しています。「和解学」は成立するのかという議論ですが、まだ結論は見えてきません。日中間の歴史和解は、なぜ、いまだに実現されていないのか。ここに和解の状態を五つ並べてみました。

一つは、現実の国際関係を処理する上で、「歴史」とはリンクしないということが、外交問題がいつも歴史問題とリンクしているということは、和解が成立していないことになります。2番目は、好感度を測る上で、「歴史」の影響が非常に低くなっていくという状態でないと、和解にはならないということです。

3番目としては、「歴史」問題で相手を刺激しないように、政府や民間は、政策面で最大限の努力をお互いにしていると。それから、相手の「歴史教育」に違和感を感じない。お互いに違和感を感じている状態では、和解は成立していないということです。さらには、「歴史研究」が歴史家に任されているという状態でないと難しいです。

このような条件が、歴史和解の基本的な条件としてつくっていかなければならないと思います。この五つの条件以外にもあるかと思いますが、少なくともこの五つの条件を達成しないと歴史和解は難しいです。

しかし、日中間の現状を考えますと、この五つの条件を全て達成することは、相当難しいです。相当に長い時間がかかるでしょう。

(スライド 戦略的和解、感情的和解、知的和解)

今までにも、いくつかの和解の状況があったと思います。「戦略的な和解」「感情的な和解」、そして、これから求められるのは「知的和解」です。

1972年は、日中国交正常化が実現されました。そのとき、歴史問題は本来大きな問題であったはずですが、非常に簡単なかたちで乗り越えました。それは「戦略的和解」だと思います。当時の危機的な国際情勢のなかで、あるいは日中のそれぞれの政治的な判断で、とりあえず和解すること、結果だけは出さないといけないというのが当時の和解の状況でした。これは「戦略的和解」と考えていいと思います。

1980年代は、日中関係が非常に良好な時代でした。これは歴史記憶と経済協力によって、感情的な面で和解・融和が成立していた時代でした。歴史に対する日本人の感性、先ほど高先生もおっしゃいましたが、日本人は非常に過去のことを反省する民族であるということですが、まさに、その基礎の上で、1980年代の良好な関係ができました。さらに、それをサポートしたのが経済協力でした。これは感情的に両国の関係を促進しました。

1990年代以降は、中国が台頭してきて日中関係が変わりました。そして、冷戦も終了して、国際情勢が大きく変わりました。「戦略的和解」と「感情的和解」を支えてきた、あらゆる環境・状況が変わってしまいました。

従って、それまでの和解が崩壊したと、言わざるを得ません。

(スライド 和解の崩壊と相互信頼の動揺)

今は、両国の国民感情が非常に悪くなっています。これは何度も利用されたデータです。この状況を乗り越えるためには、従来と同じような「戦略的和解」、あるいは、とにかくまず友好関係を深めようという「感情的和解」だけでは、もう一度、和解を実現しても長く続かないのではないかと。必要なのは「知的和解」である。知性の和解、この可能性を探っていかなければならないと考えています。

最近の日中関係の改善は、ある意味では「戦略的和解」だと解釈していいと思います。これは、一時的に関係改善につながることで大変重要ではありますが、長期的に見て、和解の安定を図るためには、それをサポートするものとして「知的和解」がどうしても必要です。

(スライド 「知的和解」に繋がるか?)

先ほど来話がありました安倍晋三首相が訪中のときに出された三つの新しい日中関係の原則です。「競争から協調へ」「隣国同士としてお互いに脅威にはならない」「自由で公正な貿易体制を発展させる」という三原則を、「知的和解」につながるような原則に、ぜひともしていただきたいと考えております。

(スライド 共有する知を追求する基礎的な作業)

それでは、「知的和解」はどうすれば達成できるのかということですが、私自身が今までやってきたことを例にして説明します。歴史研究のなかで、共有できる「知」を求めていかなければならない。知的和解は、共有する「知」をベースにしなければならぬと思います。そのため、歴史対話が有効だと思います。

いままでは、いろいろななかたちの歴史対話をおこなってきました。政府主催の歴史共同

研究もありました。成果も出されましたが、それが和解につながっているのかと言えば、残念ながら、その成果でもって和解が推進されたとは、とても言えない状態です。

(スライド 歴史認識の違いが信頼関係の基礎に悪影響)

この歴史対話のなかで、特にわれわれが認識しなければならないのは、なぜ歴史が問題なのかということです。歴史が問題なのは、戦前、日本と中国が歩んで来た戦争の歴史そのものに対する理解ではなく、どのように歴史を記憶するのか、どのように歴史を語るのか、どのように伝承していくのか、などの方法論を巡っての違いではないかと考えます。

歴史和解を実現するためには、前提条件が必要だと考えます。その前提条件とは何かといえますと、「歴史」そのものが安定でないといけません。「歴史」とは過去のことですから安定しているはずですが、それに対する解釈や理解、それに対する伝え方そのものが安定しないと歴史和解がなかなか難しい。これは当然の話です。

それを考えますと、日本と中国の間では、それぞれの歴史観が政治外交関係にリンクされて時代とともに揺れていることが、歴史和解にとって大きな障害となっています。特に、中国の歴史観の変化は、この30年間、非常に激しいです。

(スライド 中国の歴史観の転回)

ここに、歴史観の変遷を並べてみました。改革開放までの中国の歴史観は、簡単に言うと「革命史観」といえます。改革開放とともに展開されたのは「近代化史観」。その近代化史観が進むと、「文明史観」が台頭してきます。文明史観は簡単に言えば、世界と共有する価値観を追究する歴史観です。さらに、中国の国内的な歴史の視点では「民国史観」台頭したのです。

近年、「初心を忘れず」という考え方で、また「革命史観」に戻りつつあります。一回転して、原点に戻ったような印象です。このように、歴史観が常に揺れ動くなかで、歴史和解をどのように追求していけばいいのか。これは大きな課題であり、難しい点でもあります。

(スライド 革命史観から近代化史観への転換)

今までの歴史観の変化の流れを見てみますと、1970年代の終わり頃から1980年代の初めにかけて、まさに中国が近代化路線に転じた頃ですが、それは「革命史観」から「近代化史観」へ転じた頃でした。それを象徴するものとして、皆さんの手元にある「読売新聞」の記事をご覧ください。1979年3月31日の「読売新聞」です。この年はちょうど中国建国30周年です。「30歳の中国・若者たちの風景」の連載がありました。その日の記事は、日本人記者が中国の若者を取材したのですが、その若者は、「今の中国は確かに遅れている。だけど、日本の明治維新後の大発展に学べば近代化なんか簡単さ」と言っています。つまり、中国の近代化のモデルは、明治維新後の日本であるという話です。

確かに、私が留学に来たのは1980年代初めの頃ですが、私の周りにいた歴史学を勉強しようと思った人たちは、「何を研究するのですか」と聞かれたら、「明治維新」と答えていました。ですから、明治維新が持つインパクトは、1980年代初頭には、中国の人たちには非常に大きなものでした。もちろん、明治維新後の日本は、日清戦争、日露戦争、満州事変、日中戦争、太平洋戦争、などの歴史を経験したが、しかし、戦争の歴史よりも、日本がどのように近代化に進んだのか、ということへの関心が高かったのです。

(スライド 文明史観へ)

そして、「文明史観」です。「近代化史観」が進化すると、「文明史観」に辿ります。その代表的なものは、一時期非常に話題になりました、袁偉時(えんいじ)さんの一連の議論です。彼は、義和団事件を、「反文明の出来事」と定義し、義和団の評価を完全に変えてしまったわけです。その点は、省略いたします。

(スライド 袁偉時論文)

特に、日本と中国の歴史教科書の問題が出てきたとき、袁偉時さんは、確かに日本の歴史教科書には問題があるかもしれませんが、中国の教科書にはもっと問題があるのではないかという議論を展開し、大きな反響を呼びました。

(スライド 「法」と「正義」～「文明史観」)

それから、「法」と「正義」の問題です。これも中国で、歴史認識を巡って大きな展開を見せた部分です。例えば、これも袁偉時さんが言ったことです。

「法は人類文明の結晶であり、社会が運営される上での規則である。そして、国際条約は法的効力を有する。これらの規則や条約が列強主導で形成されたものであり、弱国や貧しい人々に不利なものだと批判されるのは構わない。しかし、それらを改正するまでは、われわれはそれを遵守せざるを得ない。さもないければ、無用な混乱を招き、結局は弱国や多くの民衆に不利な結果を招く」。

このように、いわば「法」と「正義」の問題を巡っても歴史学が議論を展開したのです。

(スライド 「民国史観の意味」)

さらに、中国では、この20年、中華民国史研究が非常に盛んになってきました。陳紅民(ちんこうみん)さんという歴史学者は、『中華民国史観』が中国には必要である」ということまで主張しました。

つまり 1912 年から 1949 年までの時期は、中国近代史の一つの時期であり、中華民国を正面から捉えなければならぬと主張しているのです。中国近代史研究者のかなりの部分が、「中華民国史」に力を入れて研究するようになりました。

(スライド)

そして、特に最近では、『蒋介石日記』の公開によって、非常に高いレベルまで中華民国史研究が進みました。

(スライド 日本歴史認識)

このように、中国の歴史観が変化し、進展してきました。一方で、日本の歴史認識が多様であることはご承知の通りです。私は多くの日本人が持っている歴史観は、1945 年の歴史観だと考えてきました。歴史は過去との対話と言いますが、では、日本人は何時の時代と対話しているのだろうか。今の日本はどこから来たのか、現在の日常生活、現在の日本の在り方は、1945 年の敗戦とともに作り出されたものです。ですから、今の日本があるのは、1945 年があったからであるという対話のなかで、現在の日本を説明しているわけです。

一方で、司馬遼太郎さんの議論があります。いわゆる「司馬史観」のように、明治時代の日本と現在とをつなげて考える人もいます。

中国の人々は、1840 年のアヘン戦争、1911 年の辛亥革命などと対話しながら、現在の中国を理解しています。ですから、対話する対象が異なるため、日本と中国は歴史認識のズレが発生するのは当然であるということです。

(スライド 日中若手歴史研究者会議 2001 年-2013 年)

これを解決するために、われわれが努力してきたことがいくつかあります。そのうちのひとつ、「日中若手研究者会議」を 2001 年から 2013 年まで続けました。共同研究を経て、三

つの成果を出してきています。すなわち、「国境を越える歴史認識」「1945 年の歴史認識」「対立と共存の歴史認識」です。歴史資料に基づいて、実証的に日中関係のなかの出来事を検証して、なぜ認識がズレてきたのかを検証したものです。

(スライド 「国史たち」の対話 2016 年～)

さらに、2016 年以降、「国史たちの対話」というものをおこなっています。今は「国史」と言わずに「日本史」と、ほとんどの大学で言い方を変えました。私が大学に入ったときはまだ「国史学科」でした。中国の中国史研究者と日本の日本史研究者は、お互いにあまり交流のない人たちです。一方で、それぞれの国の歴史認識に、一番大きく影響している人たちでもあります。この人たちを対話させないと、歴史認識の違いは分からないと思い、「国史たちの対話」を展開しました。

(スライド 第 1 回「国史たちの対話」～第 3 回「国史たちの対話」)

既に 3 回大きな対話をやってきました。第 1 回目は、全体の議論でしたが、第 2 回目は、「蒙古襲来と 13 世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマでした。それから、第 3 回目は「17 世紀の東アジア国際関係」がテーマでした。

17 世紀、つまり、清朝の初め頃ですが、東アジアにおいては、経済的な相互依存関係が非常に進んだ時代でもありました。一方では、各国の覇権争奪も同時に展開されていた時代でもありました。その時代の歴史が、現在の東アジア国際関係に、どのようなヒントを与えてくれるのか、という問題意識があって、「国史たちの対話」がおこなわれたわけです。

(スライド 第 4 回「国史たちの対話」)

約 1 年後、2020 年 1 月に予定されております。19 世紀の東アジアの国際関係をテーマに、次の対話、「東アジアの誕生」を予定してい

ます。このような対話を通して、歴史の和解に必要な共通の歴史認識を、最大限に拡大していこうと努力しています。

(スライド 科研：「歴史家ネットワークの検証」)

そして、現在、進めているのは、歴史家ネットワークの検証です。歴史認識問題は、日本と中国の問題、日本と韓国の問題のように見えますが、根本的なところは、各国の国内問題だと認識しています。それぞれの国のなかの歴史認識が、まだまだ混乱しているところがあります。その混乱した状態で対話をしているわけですから、国内問題としての歴史認識問題を、もう一度、検証する必要があります。

さらに、歴史対話が本格的に始まる前の、あるいは国交正常化が実現される前の 1970 年代以前の歴史対話はどのようなものだったのか。これは直接対話ではなくて、論文や文章などを通して対話を進めた時代でもありました。このような特別な形の対話も相互認識に、大きな役割を果たしました。

1980 年代以降の歴史対話、90 年代の歴史対話は、それぞれどのようなものだったのかを検証して行きます。

(スライド 「新史学」の可能性)

それから、もう一つ、強調したいことは、今、「史料」でネットワークが形成されているということです。インターネット上で、史料を共有する時代になってきました。各国が史料公開をする。公文書館、档案馆(とうあんかん)の史料が利用されやすくなりました。利用の利用で形成されたネットワークが、共通の歴史認識の形成にどのような役割を果たしているのかということも検証しなければなりません。

(スライド 伊藤博文の中国認識)

それでは、歴史と相互認識について触れてみたいと思います。日清戦争後の中国に対す

る日本人の認識について、伊藤博文の言葉をご紹介します。

「従来清国は殆ど列国と全然睽離(けいり)し、時にあるいは列国の社団に伍伴するため生ずる所の利益を享受したることあるも、その交際に随伴する責守に至りては往々自ら顧みざることあり」。

利益を享受します。しかし、利益に随伴する責任は往々にして忘れていて。そのように、当時の中国を批判しています。このような中国認識は、今も日本人が共有しています。

(スライド 満洲事変前の中国認識)

それでは、満洲事変期の日本の新聞は、中国についてどのように言っているのでしょうか。「中国人は組織ある人民」ではない、中国は「一切の条約上の義務を遵守しない国である」という中国認識です。これは満洲事変直後の、日本の中国認識でした。

(スライド 現代の中国認識の一例)

最近では、例えば、1930 年代の日本のシナリオを、どうも中国は歩んでいるのではないかと研究者が指摘しています。

中国に対する認識は、この 100 年間、日本は何を変えているのか、何を変えなかったのか、あるいは、中国はどこが変わったのか、どこが変わらなかったのかということ、この三つの例を挙げて考えても、日中間の歴史の認識問題を乗り越えて、和解を実現することがいかに難しいかということ、あらためて認識するわけです。

そのために、私は強く、「新新史学」の可能性を主張しています。20 世紀に入る前には、梁啓超(りょうけいちよう)が、いわゆる「新史学」というものを主張したことがあります。彼は政治を中心とした歴史学、朝廷の歴史学ではなく、もっと社会と国家に注目すべきだと主張しました。

それから 100 年が経過しました。今はどうなっているのかというと、先ほど言いました

ように、「史料」がネットワーク化されています。史料の多様化が進んでいます。歴史の大衆化、誰でも歴史を語るようになりました。先ほど、高先生がおっしゃった、タクシーの運転手が日中関係を語るのと同じことです。誰でも歴史を語るようになりました。語るだけでなく、インターネットを通して発信しています。それを読んだ人たちは、影響を受けます。今の歴史認識は、歴史家が中心になってつくっているのかといえば、決してそうではありません。インターネットがつくっているのかもしれないという状況です。

この状況に歴史家は、どのように対応するのか。そこには歴史学の在り方が問われています。これが「新新史学」という意味です。

「新新史学」は何を目指すのかというと、国境を越える歴史学が、一つのかたちでないといけません。それから、領域です。これは学問領域を超えた歴史学も必要となってきます。さらに、和解と和平のために、歴史はどうあるべきかを真剣に考えないといけません。

一国中心の歴史学は世界の平和と和解への貢献は限定的です。グローバルヒストリーの要素を取り入れなければなりません。

また、「歴史記憶」「感情記憶」なども歴史家が扱わなければならない重要な問題となってきました。今までの史学は、これを排除してきました。この部分を如何に歴史化するのか、これは歴史学の新しい課題でもあります。

(スライド 現代中国学・現代日本学と「知のプラットフォーム」)

さらに、「現代中国学」「現代日本学」を新しい学問のプラットフォームとして確立していく必要があると思います。いわゆる地域研究に対する考え方がだいぶ変わってきていますが、「現代日本学」と「現代中国学」、「現代韓国学」を基礎に、東アジアの「知

のプラットフォームをつくるのは、非常に有意義であると考えます。

しかし、いろいろな問題もあります。例えば、中国の日本研究は、日本の中国研究の影響下にあるという特徴があります。北京に、日本学研究センターがあります。そこに派遣された日本人の先生たちは、中国研究者が多いのです。日本の中国研究者が、中国の日本研究を指導しているということです。このような状況をどう理解すればいいのか、考えていかなければならない問題です。

(スライド 「知的論争」から生まれる「知的和解」)

もう時間がなくなってしまいましたが、共有する「知」、これをまず構築していくと。先ほど、歴史認識のいろいろな変動を見てきましたが、この「公共知」から生み出す「知のプラットフォーム」を創成して、そこから日本と中国の知的和解をまず実現する。知的和解は、知識人同士の対話のなかで成立しやすいです。その知的和解から、徐々に社会に影響を与え、政治に影響を与え、そのうえで政治的な和解、あるいは国民の感情の和解に結び付けていけば、安定した和解になるのではないかと考える次第です。

ご静聴、ありがとうございました。